



第2章

木津川市の教育をめぐる状況

第2章 木津川市の教育をめぐる状況

第1節 第1次計画の成果と課題

重点目標1 質の高い学力をはぐくむ

質の高い学力をはぐくむため、小中学校では、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得するための取組を進めるとともに、授業や家庭での学習に1人1台端末を活用することで、授業改善並びに家庭学習の充実に向けた取組が進展しました。

小小連携及び小中連携、幼保小での連携をさらに進め、就学前から中学校卒業までを見通した系統的でより効果のある授業改善を推進することや児童生徒の学習の基盤となる言語能力や情報活用能力等の資質能力の向上を図り、自分の考えを深め、他者とのかかわりの中で課題を見出し協働して解決していく「主体的・対話的で深い学び」の充実に向け、さらに取組を進める必要があります。

重点目標2 豊かな心と規範意識をはぐくむ

本市や学校において、いじめ等の児童生徒の問題行動における組織的な指導・相談体制の確立を図り、暴力等の反社会的行為は、学年により増減はあるものの全体の件数は減少しました。また、不登校児童生徒に対する様々な取組を進めていますが、不登校児童生徒数は増加傾向にあります。今後もより一層の取組の強化が必要です。

令和4（2022）年3月には「木津川市子どもの読書活動推進計画」（第三次推進計画）を策定し、家庭や学校・園における読書活動を推奨するとともに、様々な取組や読書環境の整備により、読書に対する子どもの意識の高揚や不読率が改善されました。

重点目標3 健やかな体をはぐくむ

子どもの健やかな体をはぐくむために、栄養教諭による巡回指導等を活用し全小中学校で発達年齢に応じた食育を進めるとともに、地産地消の取組を推進しました。また、喫煙や飲酒、薬物乱用等の防止教育を実施し、現代的な健康課題への理解や対応を進めました。各学校において食物アレ

アレルギー対応マニュアルに関する研修やエピペンの使い方など食の安全に対する研修を実施していますが、更に安全の意識を高めるため、マニュアルの見直しや研修の充実が必要です。

新型コロナウイルス感染症対策による活動制限等により体力の低下が懸念されており、体力向上の取組の充実が必要です。

重点目標4 一人一人の個性や能力を伸ばし、社会の形成者としての必要な資質をはぐくむ

学校・園では、人権教育や特別支援教育の充実に向け、教職員の資質向上をめざした研修を推進し、実践を展開してきました。支援を必要とする子どもに対して、校種間・関係機関等との連携を図ることにより、切れ目のない支援を行うことができました。今後も学校・園における合理的配慮に努めるとともに、支援を必要とする子どもが増加し多様化する中で、一人一人の教育的ニーズに柔軟に対応した支援をさらに行う必要があります。

貧困対策を含め、生まれ育った環境に左右されず、「誰一人取り残さないよう」すべての子どものライフステージに応じた更なる支援の充実を進めていくことが必要です。

重点目標5 社会の変化に対応し、未来を確かに生きる力をはぐくむ

小中学校において、1人1台端末を配付し、GIGAスクール構想に対応した教育ネットワーク環境の整備を行いました。ICTの利活用により、わかる授業、児童生徒の興味関心を高める授業づくりを進めています。

また、グローバル化が進展する中、すべての小学校に英語の専科教員を導入し、外国語によるコミュニケーション活動の充実や海外の学校との異文化交流を通して、国際感覚を磨く取組を行いました。

高度化、複雑化する情報化社会を生き抜くために、情報モラルを含む情報活用能力の育成に引き続き取り組む必要があります。また、持続可能な社会の担い手として、生命や自然を尊重する精神を養うとともに、環境保全やよりよい環境の創造の為に持続可能な開発のための教育を推進する必要があります。

重点目標6 魅力ある・信頼される学校・園をつくる

城山台地区の児童生徒の急増に対応し、安心・安全で快適な教育環境を計画的に整備するとともに、それ以外の減少傾向にある学校の今後の在り方について、令和3年8月「木津川市立小学校及び中学校の在り方検討委員会」を設置し、今後大きく変化する社会を見据え、未来を生きる子どもたちにとって望ましい義務教育9年間の学校の在り方について審議を行い、令和5年3月に「木津川市立小・中学校の在り方に関する基本計画」を策定しました。

今後は、この基本計画に即して中学校区単位での具体的な計画を進めていきます。

また、各校・園の状況や実態に即して、関係諸機関と連携し、通学路の安全、不審者対応、交通安全上の課題解決に向けた取組を推進しました。

学校の施設整備については、校舎及び体育館等の耐震工事や洋式トイレの設置等を計画的に実施し、平成31(2019)年度には普通教室における空調設備を整備する等、学習環境が改善しました。城山台地域における児童生徒急増対策として、城山台小学校敷地内に新学舎の設置や人的配置の充実、特定地域学校選択制の導入、中学校の通学区域の変更等を実施しました。

各校・園の施設等の長寿命化計画を踏まえた配置計画を策定し、児童生徒が学習や活動に集中できる快適な環境及びバリアフリー等に対応した安心・安全な施設の整備を計画的に進めていく必要があります。

教職員のワークライフバランスを重視した働き方改革を、木津川市全体で推進していく必要があります。

重点目標7 地域の力を活かして子どもをはぐくむ

地域の力を活かして子どもをはぐくむため、地域の人材を積極的に活用し、教育活動の支援を推進しました。また、児童虐待に関する教職員の研修を通して早期発見・安全の確保に関する教員の共通理解の促進に努めるとともに、スクールソーシャルワーカーや関係諸機関と連携し、支援が必要な家庭に対して迅速な対応に努めました。加えて、保護者の交流の場を設け、保護者同士の交流・情報交換に努めることができました。

地域の人材については、高齢化が進んでおり、より幅広い年齢層の人材の養成と確保が必要です。近年、社会問題となっているヤングケアラーの問題について、子どもたちの学習への影響が懸念されます。そのことから、教職員が子どもたちのSOSに早期に気付き、福祉機関への支援につなげ

る取組を進める必要があります。

重点目標 8 地域を学び、郷土を大切にすることをはぐくむ

地域を学び、郷土を大切にすることをはぐくむため、本市の文化財を活用した出前授業や地域資源を活用した校外学習を実施しました。また、木津川市小学校社会科副読本「わたしたちの木津川市」において、本市の文化財を取り上げ、地域の文化財教材を作成し、郷土学習を推進しました。

今後も地域の文化財や伝統に親しむ機会を増やす取組を継続していく必要があります。また、関西文化学術研究都市には多くの企業やそこで働く外国人が住んでおられます。より多くの地域の素晴らしさを学ぶためには、小・中・高・大との連携を大切にしつつ、今後、外国人との交流や、最先端の技術を持つ企業とのネットワークをどのように築いて、郷土愛に結びつけていくかということについて検討することが必要です。

第2節 木津川市の教育等を取り巻く状況

1 人口等の状況

本市の令和5（2023）年3月末現在の人口総数は、80,026人、世帯数は、33,123世帯です。平成19（2007）年3月12日に木津川市が誕生した時点では、66,490人、22,991世帯でしたが、この16年間で、13,536人、10,132世帯増加しました。

全国的に少子高齢化が進行し、人口減少が懸念される中で、本市においても、人口減少の転換点を迎え、少子高齢化が進むと予測されます。合併以降増加を続けた児童生徒数については、大規模な住宅開発等により一部の地域において当面の増加傾向があるものの、市内全体では減少するものと見込まれます。

【年齢別人口の動向】

毎年3月末現在

区 分	15歳未満	15歳以上 65歳未満	65歳以上	合 計
平成30年 (2018年)	12,961 (16.95%)	45,293 (59.25%)	18,193 (23.80%)	76,447 (100%)
平成31年 (2019年)	13,091 (16.88%)	45,766 (59.03%)	18,675 (24.09%)	77,532 (100%)
令和2年 (2020年)	13,147 (16.77%)	46,184 (58.90%)	19,081 (24.33%)	78,412 (100%)
令和3年 (2021年)	13,144 (16.58%)	46,585 (58.77%)	19,534 (24.65%)	79,263 (100%)
令和4年 (2022年)	12,990 (16.31%)	46,825 (58.80%)	19,816 (24.89%)	79,631 (100%)
令和5年 (2023年)	12,703 (15.87%)	47,303 (59.11%)	20,020 (25.02%)	80,026 (100%)

(資料：市民部市民課)

2 幼稚園、小学校及び中学校の状況

(1) 幼稚園の状況

令和5（2023）年5月1日現在、市内には市立幼稚園が3園あり、幼児数は250人（3歳児45人、4歳児107人、5歳児98人）、学級数は11学級となっています。また、令和4年3月に「木津川市公立幼稚園再編実施計画」を策定し、高の原幼稚園については、令和7年度の閉園に向けた手続きを進めています。

令和6年度よりいづみ・やましろ保育園は幼保連携型認定こども園に移行します。

(2) 小学校の状況

令和5（2023）年5月1日現在、市内には13校の市立小学校があり、児童数は5,301人、学級数は236学級です。平成30（2018）年同期と比較すると、城山台小学校区においては、著しい増加がみられ、令和7（2025）年度には1,800人を超えると推計していますが、それ以外の小学校区は減少傾向にあります。

(3) 中学校の状況

令和5（2023）年5月1日現在、市内には5校の市立中学校があり、生徒数は2,466人、学級数は83学級です。平成30（2018）年同期と比較すると、生徒数は、141人（6.1%）、学級数は3学級（3.8%）増え、木津中学校、木津南中学校で増加傾向がみられます。

一方、その他の中学校では生徒数の減少がみられ、地域により差がある状況です。

【 市立幼稚園・幼保連携型認定こども園・小学校・中学校 】

幼稚園 (3園)	木津幼稚園 相楽幼稚園 高の原幼稚園
幼保連携型 認定こども 園 (2園)	いづみこども園 (1号認定) やましろこども園 (1号認定) ※令和6年度より幼保連携型認定こども園に移行
小学校 (13校)	木津小学校 相楽小学校 高の原小学校 相楽台小学校 木津川台小学校 梅美台小学校 州見台小学校 城山台小学校 加茂小学校 恭仁小学校 南加茂台小学校 上狛小学校 棚倉小学校
中学校 (5校)	木津中学校 木津第二中学校 木津南中学校 泉川中学校 山城中学校

3 学校給食センターの状況

令和2（2020）年に第一給食センターを新設し、2センター体制に再編し、徹底した衛生管理体制のもとで統一献立、アレルギー対応を行い、市立幼稚園（3園）、小学校（13校）、中学校（5校）へ安心・安全な給食の提供を行っています。

学校給食法（昭和29（1954）年法律第160号）が改正され（平成21（2009）年法律第53号）、「学校における食育の推進」が位置づけられるとともに、栄養教諭が学校給食を活用した食に関する指導を充実することについて明記されました。本市では栄養教諭が中心的な役割を担い、系統的な食の指導を進めるとともに、食の安全性の確保や地産地消の推進等、学校給食を活きた教材として食育を推進しています。

【市立学校給食センター】

令和5（2023）年5月1日現在

区分	構造	運営方式	調理能力	運営時期
第一 学校給食 センター	鉄骨造2階建	フルドライ システム	米飯 7,000食 副食：2献立制 7,000食	2020年度 から
第二 学校給食 センター	鉄骨造2階建		米飯 2,500食 副食 2,500食	2010年度 から

4 社会教育施設の状況

社会教育施設として、公民館、図書館、各種スポーツ施設等数多くの施設を有しており、市民の学習・交流の場、体力づくりの場となっています。

人生100年時代を見据えて、人生を豊かに暮らしていくために、生涯にわたって学びを継続していく必要性が高まっており、今後もニーズの多様化・高度化に対応したサービスの提供が不可欠となっています。ライフステージやライフスタイルに対応した誰もが参加しやすく、気軽に学ぶことができる環境整備を進めていく必要があります。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大により、生涯学習や文化芸術・スポーツ活動等においても、イベントや事業の中止、施設の休館、利用人数の制限等、十分な活動ができない状況となりました。

社会教育施設での活動の両立を進めるために、基本的な感染対策を講じながら、生涯学習、文化芸術・スポーツ活動の継続が必要です。

【市立社会教育施設】

令和5（2023）年5月1日現在

種類	数	施設名
公民館	2	南加茂台公民館、瓶原公民館
図書館	3	中央図書館、加茂図書館、山城図書館
文化ホール	2	加茂文化センター、山城総合文化センター
交流会館	3	中央交流会館、西部交流会館、東部交流会館
スポーツ施設	14	中央体育館、市民スポーツセンター、木津グラウンド、兜谷公園、木津川台公園、梅美台公園、加茂グラウンド、赤田川グラウンド、塚穴公園、不動川公園、やすらぎタウン山城プール、上狛駅東公園、山城コミュニティ運動公園、城址公園
その他施設	6	加茂青少年センター、文化財整理保管センター、文化財整理保管センター分室（くにのみや学習館）、小谷上教育集会所、当尾の郷会館、青少年育成施設

5 文化財の状況

本市には、先人が培ってきた歴史や文化が脈々と受け継がれ、国宝や重要文化財に指定された数多くの有形・無形の文化財を有しています。特に、本市は府内において、京都市に次ぐ文化財の宝庫となっています。

また、歴史的な街並みや伝統的な祭礼等は、地域住民の活動により守られてきました。しかし、社会の変化により変貌や衰退したものも多くみられます。これら貴重な歴史的文化遺産を大切に保存し、次世代に継承するための取組が必要となっています。

このことから、身近にある地域の文化遺産を教材とした教育活動や生涯学習の場として活用する必要があります。

【 指定文化財等の件数 】

令和5（2023）年3月末現在

区 分		国 指 定	国 登 録	京都府 指 定	京都府 登 録	京都府 決 定	京都府 暫定登録	木津川市 指 定
有 形 文化財	建造物	19(3)	2	4	8		20	7
	絵画	3		2	1		45	5
	彫刻	26(3)		5	3		6	11
	工芸品	1		3	1			
	書跡典籍	1					5	1
	古文書	1		1			6	3
	考古資料			1			8	3
	歴史資料			1				4
無形民俗文化財		1		2	5			1
有形民俗文化財					3		2	
史跡名勝天然記念物		8(1)		2			4	5
環境保全地域・地区						9		
合 計		60(7)	2	21	21	9	96	40

備考 1（ ）は、重要文化財内の国宝数及び史跡名勝天然記念物内の特別指定数を内書き。

6 感染症対策

新型コロナウイルス感染症の拡大により、令和2年3月から5月までの約3か月の間、学校はかつてない長期の臨時休業を行うこととなり、その後の学校は大きく変容することを求められました。

全国的に新型コロナウイルス感染症の流行の波が発生し、特に、強い感染力を持つオミクロン株の影響を受けた令和4年1月頃からの感染拡大期においては児童生徒等の感染者数も大きく増加しました。

そのような中、学校では、密の回避や正しい手洗い、マスクの着用等の基本的な感染対策をはじめ、授業や学校行事、部活動における学習内容や活動内容を工夫しながら、可能な限り教育活動を継続し、子どもたちの健やかな学びを保障してきました。また1人1台端末の配備により、新型コロナウイルス感染症に罹患したり、自宅待機を余儀なくされたりした児童生徒に対しても学びを継続することができました。

7 ICT教育環境の状況

GIGAスクール構想に係る端末整備により令和2年度に全児童生徒に1人1台端末を配備し、授業支援システムを活用した児童生徒の意見集約や共同作業を実現するなど、授業でのICT利活用が進んできています。合わせて小・中学校へのプログラミング教材の導入によりプログラミング的思考の更なる育成や、ビデオ会議システムの導入によりオンライン授業が可能となり、新型コロナウイルス感染に罹患したり、自宅待機を余儀なくされたりした児童生徒や不登校児童生徒に対しても学びを保障することが可能となるなど、これまでの実践とICTとの最適な組み合わせを実現しています。

また、校務支援システム等を導入し、教職員の負担軽減を図っています。

教育DX（デジタルトランスフォーメーション）の実現に向けた国や府の動向を踏まえて、今後もインターネット回線の増強や1人1台端末の安定的な活用環境の整備を進めていく必要があります。

【 ICT機器整備状況 】

平成30年度 (2018年度)	校務支援システム導入
令和元年度 (2019年度)	コンピュータ教室用PCをタブレットPCに更新
令和2年度 (2020年度)	全児童生徒に1人1台端末配備 授業支援システム導入 小学校プログラミング教材配備
令和3年度 (2021年度)	デジタルドリル導入 ICT支援員増員（ICT支援員は平成21年（2009年）より配置） オンライン授業環境の整備 ローカルブレイクアウトの実施（インターネット速度改善）
令和4年度 (2022年度)	放課後児童クラブ無線Wi-Fi整備 中学校プログラミング教材配備

第3節 児童生徒の学習や生活の状況

本市の子ども一人一人が、可能性を伸ばし、多様な幸せを実現する力を発揮するためには、「主体的・対話的で深い学び」につながる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「多様性を尊重し合う豊かな人間性」「心身の健やかな成長」をバランスよくはぐくむことが重要です。

そのためにも、本市の児童生徒の学習や生活に取り組む態度等を把握・分析するとともに、課題の検証を行い、改善を図ることがこれからも大切です。

そこで、平成30(2018)年度及び令和4(2022)年度の全国学力・学習状況調査(対象：小学6年生、中学3年生)、全国体力・運動能力、運動習慣等調査(対象：小学5年生、中学2年生)の結果を比較・分析し、本市の児童生徒の学力・学習状況や体力・生活状況を示します。なお、質問項目によっては平成30年度にないものがあるため、その場合は平成29年度の結果を比較・分析しています。

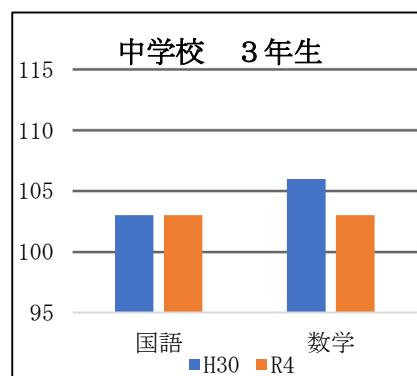
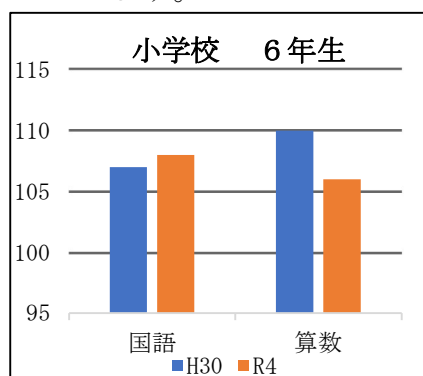
また、質問項目によっては、年度ごとの結果が大きく変わる場合もあるため、その都度結果を分析し、本計画の進捗状況を把握する必要があります。

1 学校での状況

【学習(国語、算数・数学)について】

○ 学力の定着状況について

本市の正答率は、国語、算数・数学のすべての問題において、全国の平均正答率(100)を上回っています。算数・数学における全国との差の減少は、年度ごとに変動する数値の想定内にあります。この5年間の取組により、学校間の格差も広がることなく、基礎的・基本的な知識・技能を習得し、思考力・判断力・表現力を身につけることで、学力の維持につながっています。



※ 全国の平均正答率を100として標準化した数値

※ 平成30年度の数値は、各教科A(主に「知識」に関する問題)とB(主に「活用」

に関する問題)との正答を合算し、平均した正答率を元に算出したもの

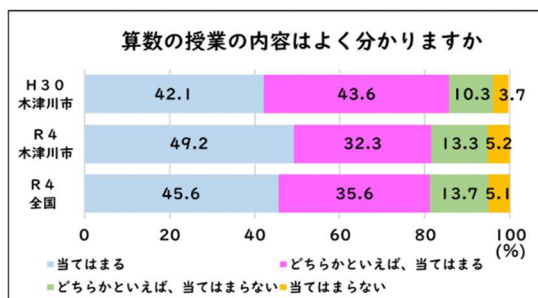
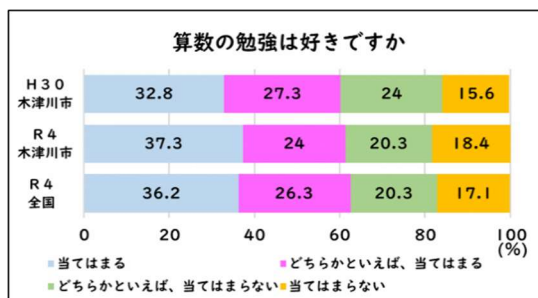
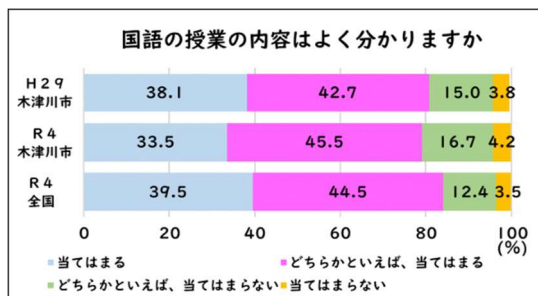
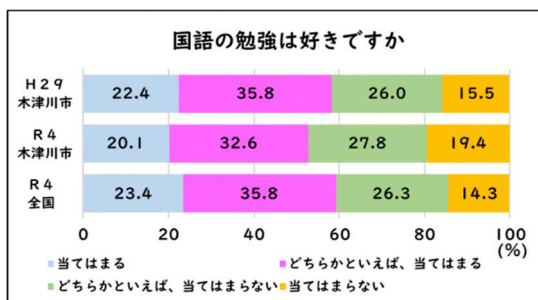
○ 学習に対する関心、理解について

5年前と比較して国語に対する関心は、小学校ではやや低く、中学校ではあまり変化がない状況です。算数・数学については、小中学校ともに向上し、特に中学校においては10%を超え高まりました。

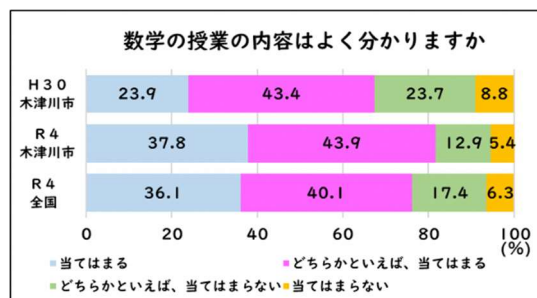
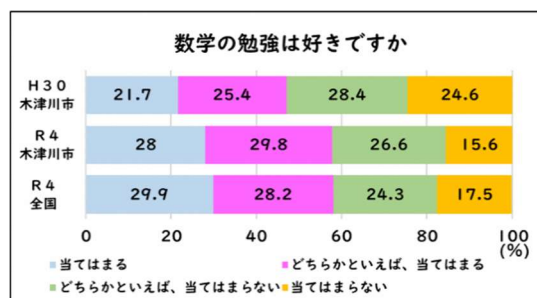
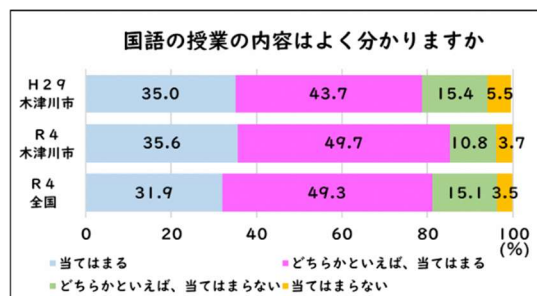
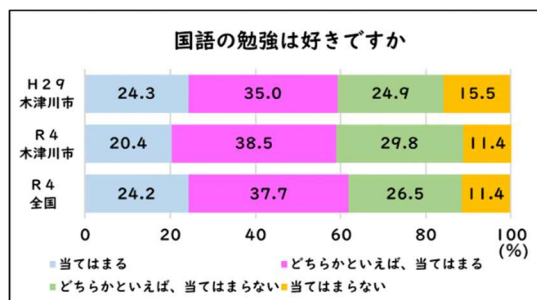
理解については、小学校では国語・算数ともにやや低くなり、中学校ではともに向上し、全国と比較しても高い状況にあります。

今後も主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善に一層取り組んで行く必要があります。

小学校 6年生



中学校 3年生

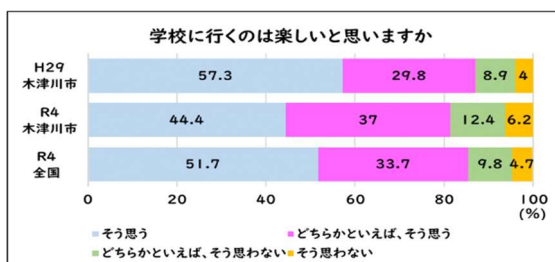


【生活について】

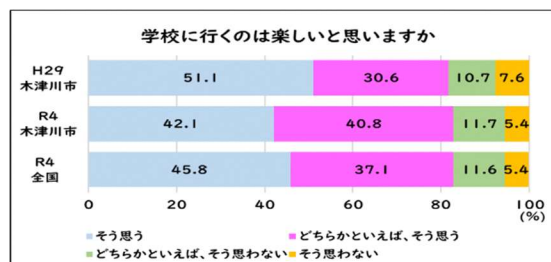
○ 学校に行くことについて

「学校に行くのは楽しいか」に対して、小学校では、そう思う・どちらかといえばそう思うと回答した割合が、5年前と比べ減少しています。一方、中学校では、「そう思わない」の割合が減少し、肯定的な回答が増加しています。校種ごと及び各学校での分析による対応が求められます。

小学校 6年生



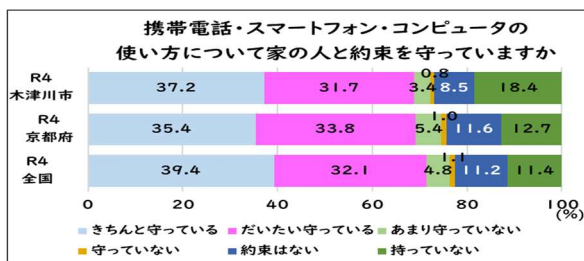
中学校 3年生



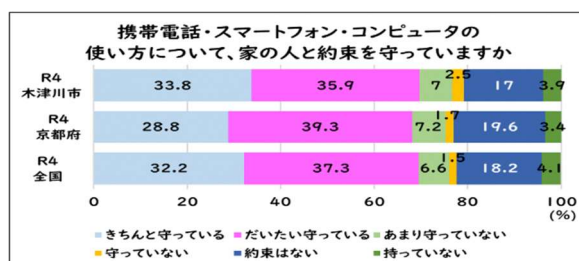
○ 規範意識について

令和3年度までの「学校のきまりは守っていますか」という質問から令和4年度は携帯電話、スマートフォンやコンピュータの使い方についての質問へと変更されました。

小学校 6年生



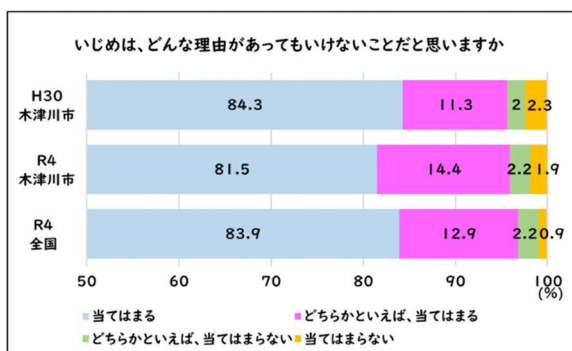
中学校 3年生



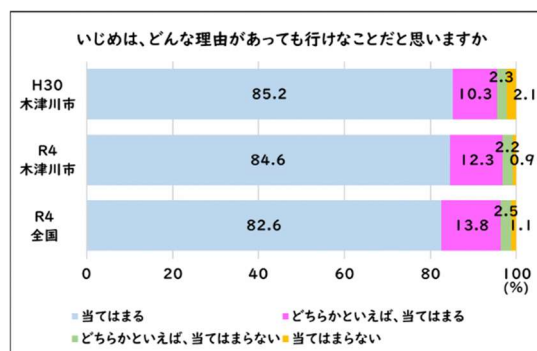
○ いじめについて

「いじめは、どんな理由があってもいけないことだ」と感じている児童生徒が全国平均に比べて小中学校ともに高い割合を示しています。しかし、5年前に比べて、意識がやや減少しています。

小学校 6年生



中学校 3年生



【 体力・運動能力、運動習慣について 】

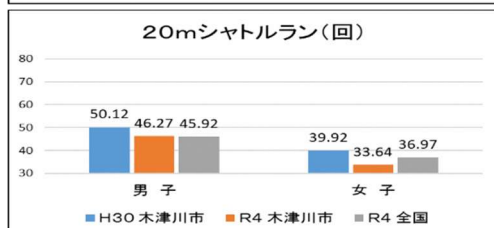
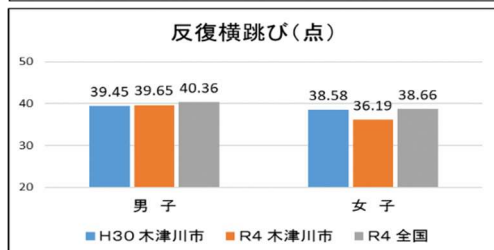
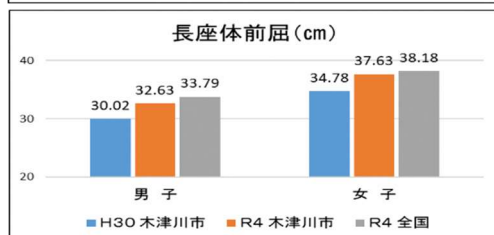
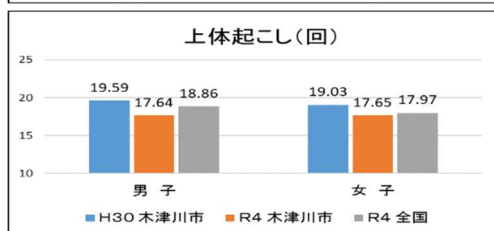
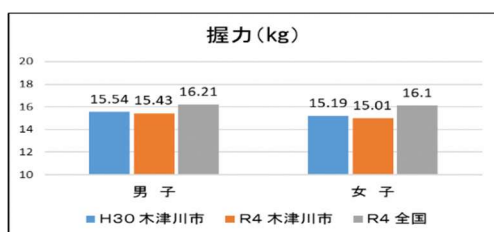
○ 体力テスト（8項目）について

小学校男子は、全身持久力と跳躍で全国平均を上回っているものの握力や柔軟性等、跳躍以外は全体的に下回っています。同女子も同様の傾向が見られ、疾走能力は上回っていますが、全身持久力は低いです。体力テスト合計点は、男女とも全国平均を下回り、平成30年と比較しても全体に下がっています。

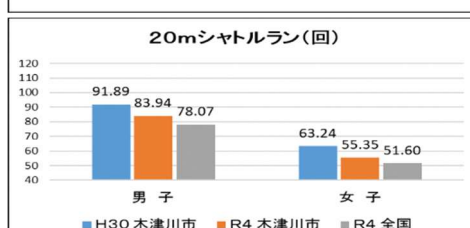
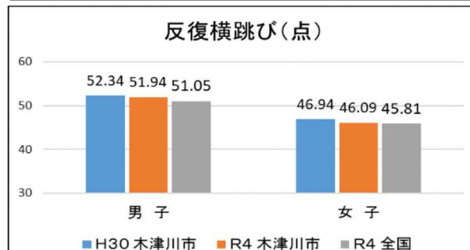
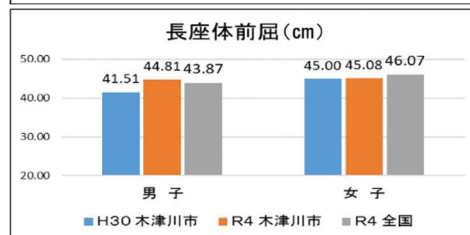
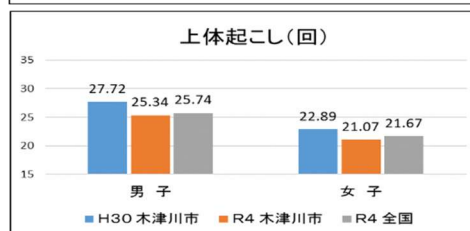
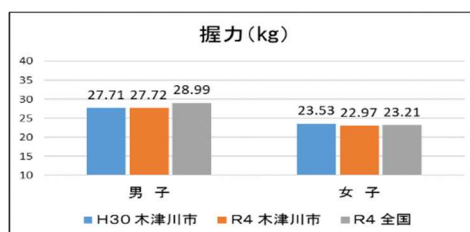
中学校男子は、多くの種目で全国平均と同程度ですが、柔軟性や全身持久力、敏捷性は上回っています。同女子も同様の傾向が見られます。

全体として、児童生徒の柔軟性が、5年間で改善されてきました。

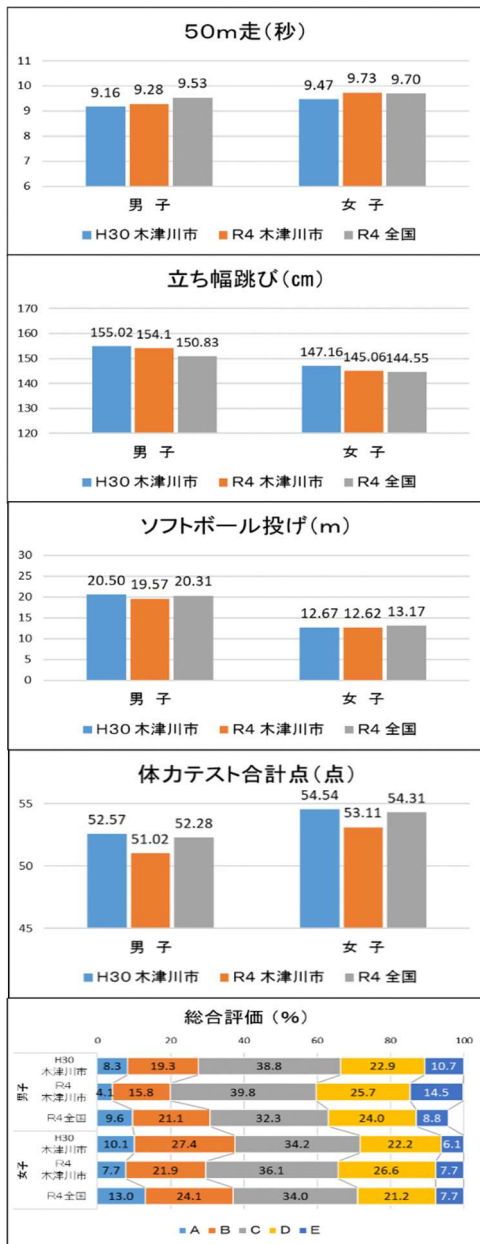
小学校 5年生



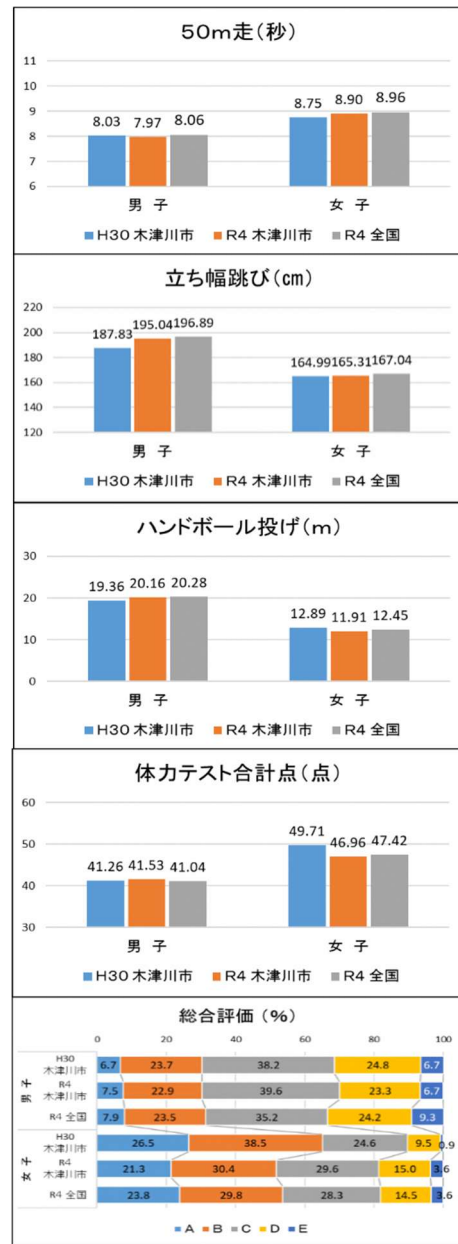
中学校 2年生



小学校 5年生



中学校 2年生



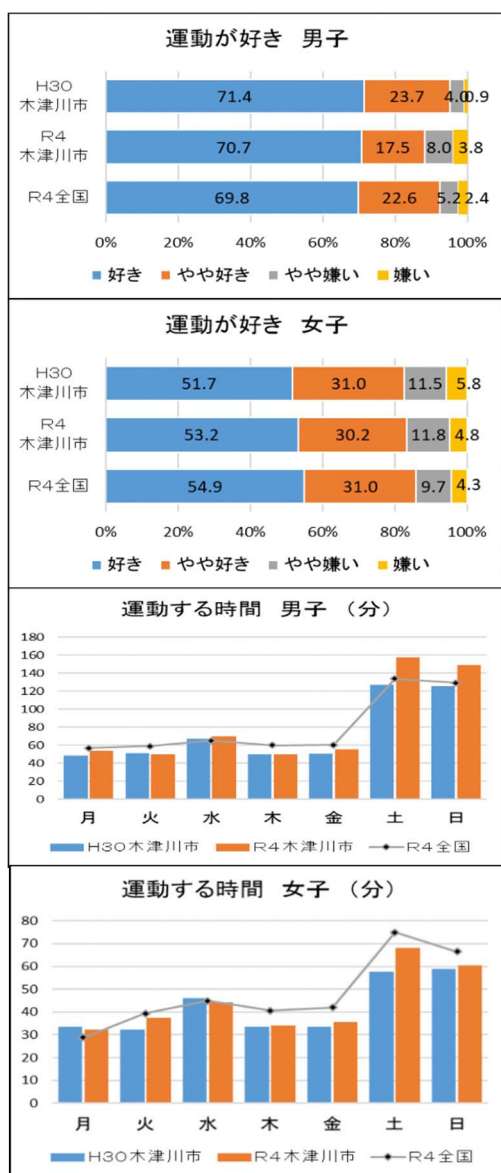
種目	単位	体力要素	測定
握力	kg	筋力	左右握力の平均値
上体起こし	回	筋パワー・筋持久力	30秒間に上体を起こした回数
長座体前屈	cm	柔軟性	長座位で前屈したときの両手の前方への移動距離
反復横跳び	点	敏捷性	20秒間に両脚で左右側方に反復跳躍した回数
20mシャトルラン	回	全身持久力	20m 走行の折り返し回数
50m走	秒	疾走能力	50mの疾走時間
立ち幅跳び	cm	筋パワー・跳躍能力	両脚で前方へ跳躍した直線距離
ボール投げ	m	巧緻性・投球能力	ソフトボール(小学校)、ハンドボール(中学校)を遠投した距離
体力合計点	点	体力テスト成績を1点から10点に得点化して総和した体力テスト合計得点	
総合評価	5段階	体力テスト合計得点のよい方からABCDEの5段階で評定した体力の総合評価	

○ 運動習慣について

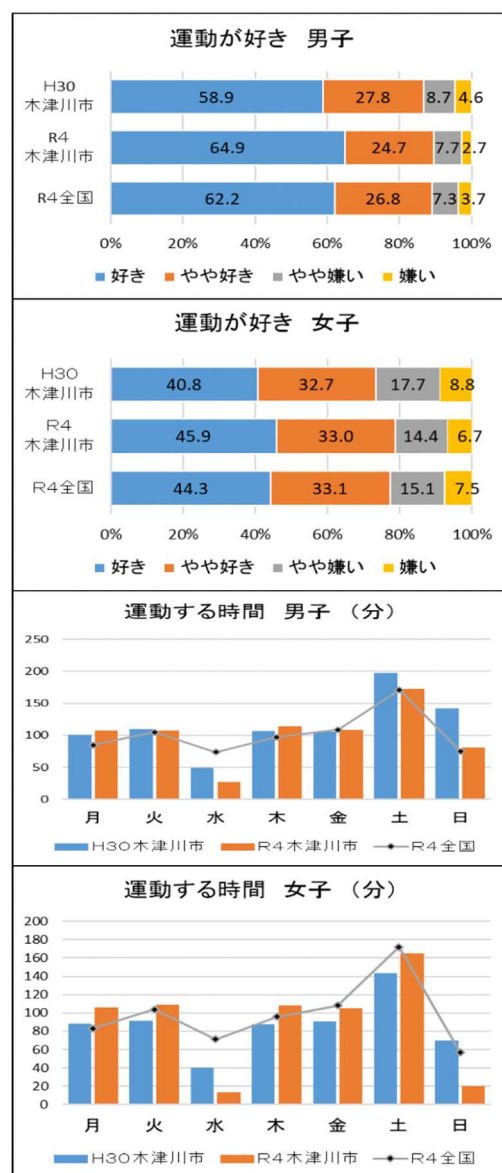
運動が好きだと思っている児童生徒の割合は、中学校は男女とも全国平均を上回っています。小学校では全国平均とほぼ同程度となっていますが、5年前と比べると女子は増加傾向にあります。

運動する時間は、小学5年生、中学2年生ともに全国平均とほぼ同じになっていますが、5年前に比べ休日の運動時間が増加しています。また、小学5年生女子の運動時間が大幅に増加しているのに対し、中学2年女子は曜日によって減っています。

小学校 5年生



中学校 2年生



2 家庭・地域での状況

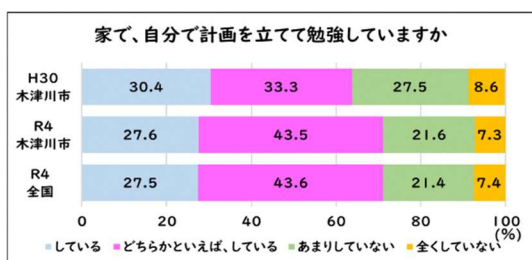
【家庭学習・読書について】

○ 家庭学習について

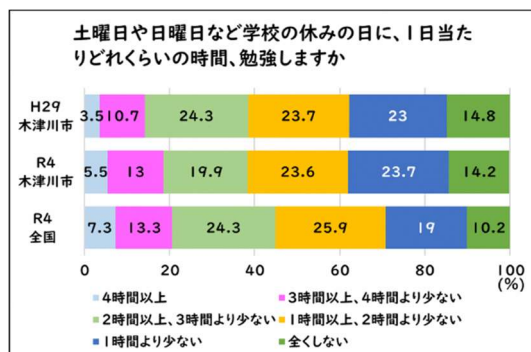
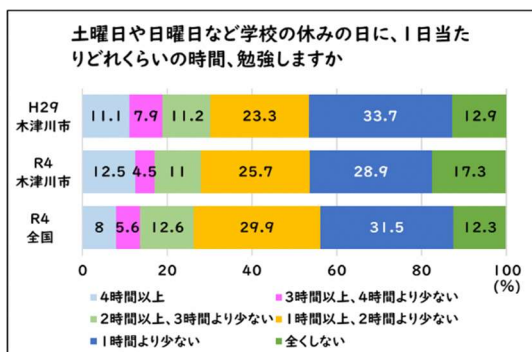
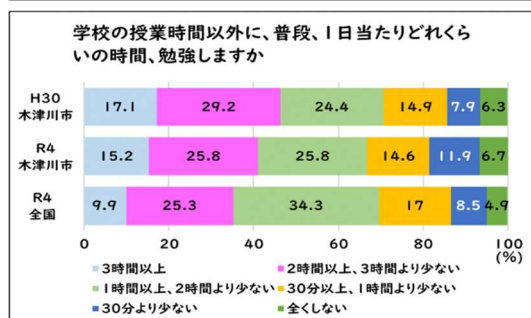
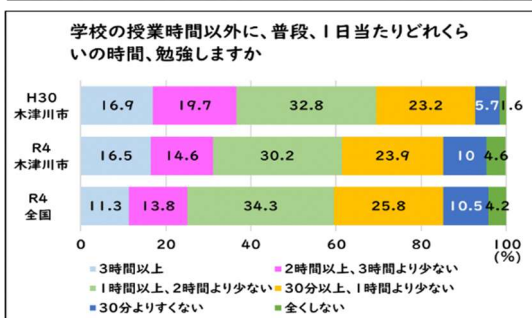
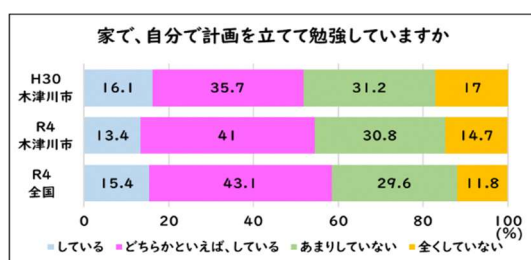
家庭での学習状況について、「家で、自分で計画を立てて勉強している」割合が、小学校では全国平均とほぼ同じですが、中学校ではやや低い状況にあります。また、5年前に比べ、自分で計画を立てて勉強している児童生徒が増え、全くしていない児童生徒の割合が減ってきています。今後も主体的で計画的な家庭学習の定着に向け取組を進める必要があります。

「学校の授業時間以外の勉強時間」について、平日では全国平均より勉強時間が長い児童生徒の割合が高いですが、5年前に比べ、減少傾向にあります。また、土曜日・日曜日に全く勉強しない児童生徒の割合が全国平均と比べると高く、休日の家庭学習についての啓発が引き続き必要です。

小学校 6年生



中学校 3年生



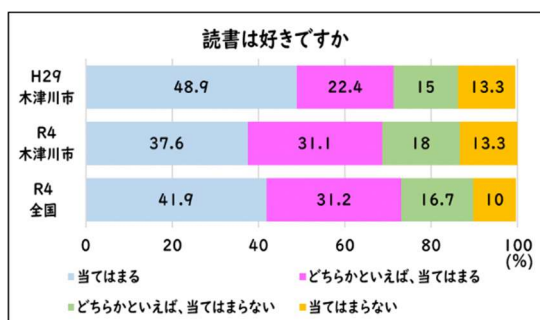
○ 読書習慣について

読書が好きである割合は、全国平均と比べて小学校はやや低く、中学校はほぼ変わらない状況ですが、平成 29 年度と比べると積極的に肯定する割合が小中学校ともにはっきりと低下しています。

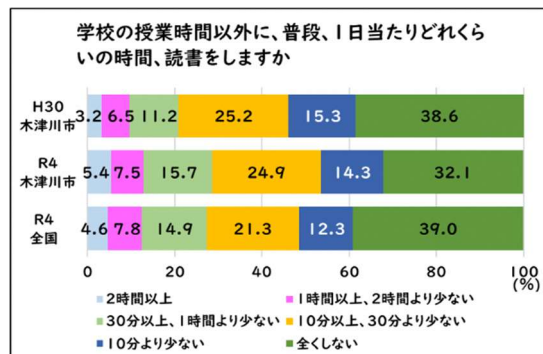
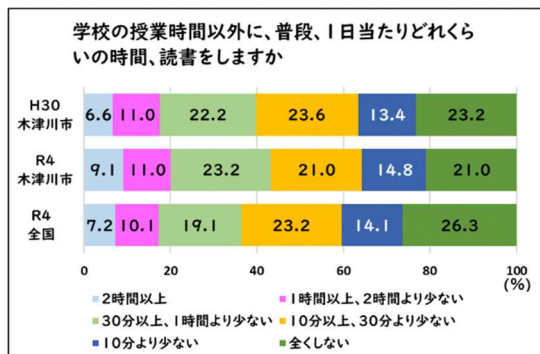
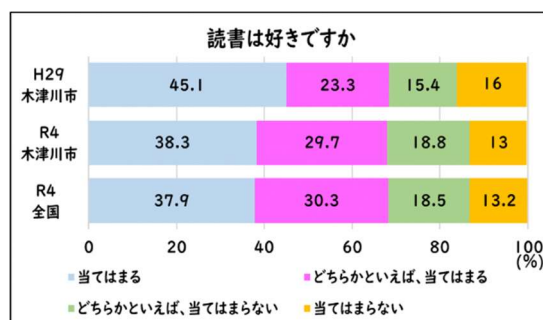
1日あたりの読書時間については、小中学校ともに5年前と比べて増えており、特に全く読まない児童生徒の割合が減少しました。全国平均と比べても、読書時間は多い状況です。

なお、学校図書館や地域の公立図書館の利用については、令和2年2月からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、学校や公立図書館の閉鎖、人数や時間の制限があり、利用を促す状況にはありませんでした。今後は、感染予防を徹底した上で、学校図書館や地域の公立図書館の利活用を進め、読書の習慣が十分に定着していない児童生徒への取組を進めていく必要があります。

小学校 6年生



中学校 3年生

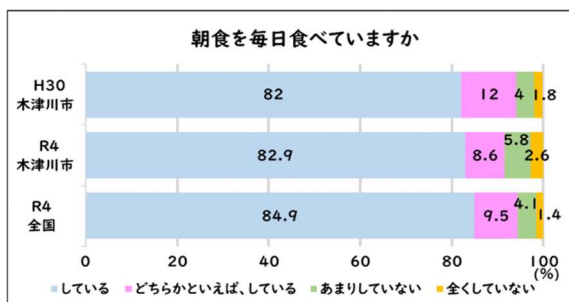


【生活について】

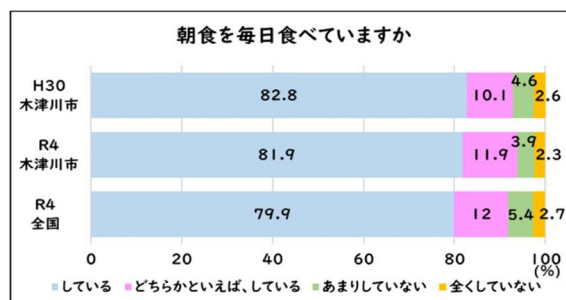
○ 基本的な生活習慣について

朝食を「毎日食べている」「どちらかと言えば毎日食べている」と回答したのは、小学校で90%以上、中学校で90%以上となり、全国平均とほぼ同程度の割合となっています。しかし、5年前の結果と比べると「あまり食べていない」「全く食べていない」と回答した割合が増えています。

小学校 6年生



中学校 3年生

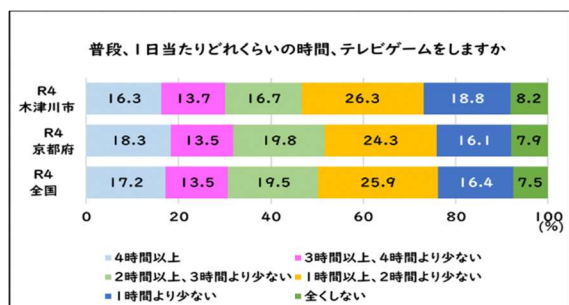


○ テレビ、ゲームについて

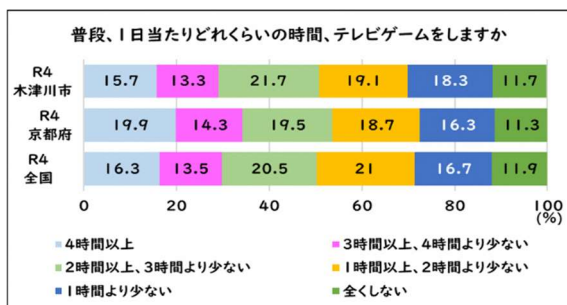
小中学校ともほぼ全国平均と同程度の割合となっています。

また、1日あたりのテレビゲームをする時間についても、小中学生はいずれも全国平均と同程度の割合となっています。

小学校 6年生



中学校 3年生

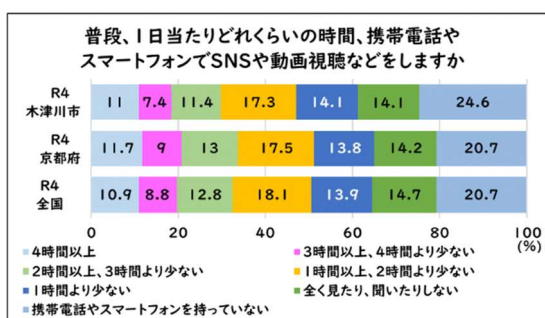


※平成30(2018)年度の結果は、調査項目になかったため掲載していません。

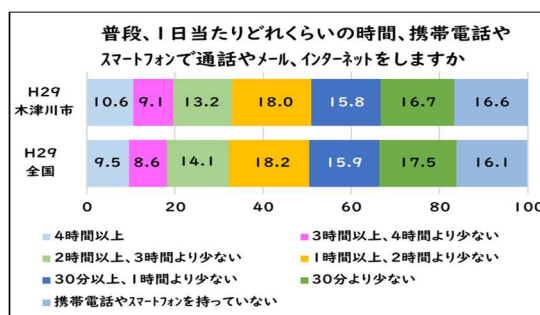
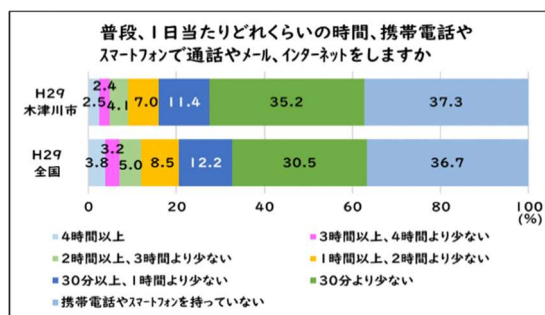
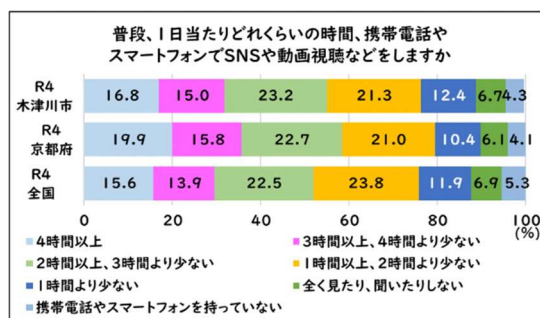
○ 携帯電話、スマートフォンの使用について

近年、携帯電話やスマートフォンを保持する児童生徒の割合が増えてきています。使用時間については、小中学生ともに全国平均と同程度の割合となっていますが、1日あたり1時間以上使用する小学生は50.6%程度（平成30年度16%）、中学生で75.8%程度（平成30年度50%）と急激に増えていきます。

小学校 6年生



中学校 3年生



※令和4（2022）年度と平成29（2017）年度の結果は、調査項目に違いがあるため分けて掲載。

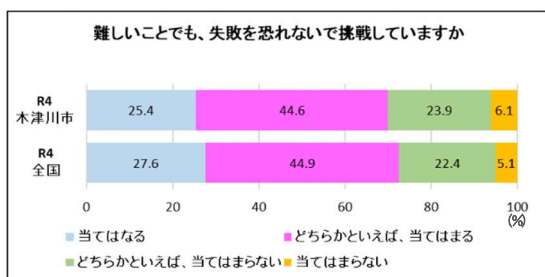
【 自我意識について 】

○ 挑戦への意識、自尊感情について

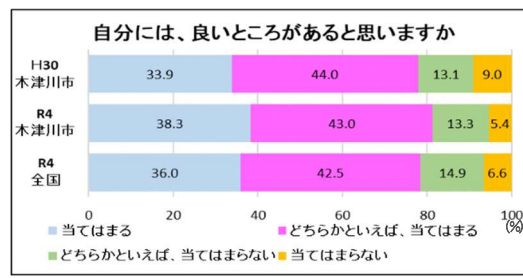
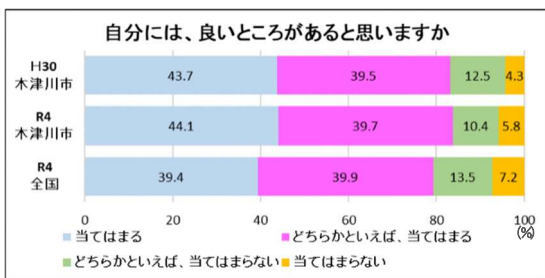
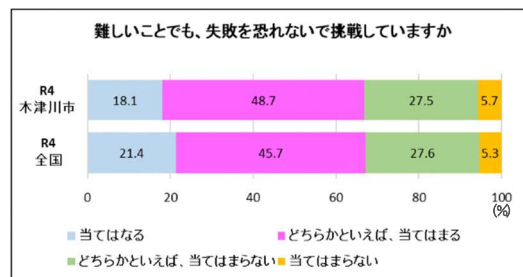
「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか」の問いには、小中学生ともに全国平均と同程度の割合です。5年前のデータはありませんので、比べることはできません。

「自分には、よいところがあると思いますか」の問いには、全国平均より高い割合を示すとともに、男女ともに5年前よりも自尊感情の高まりが見られます。

小学校 6年生



中学校 3年生



【 地域との関わりについて 】

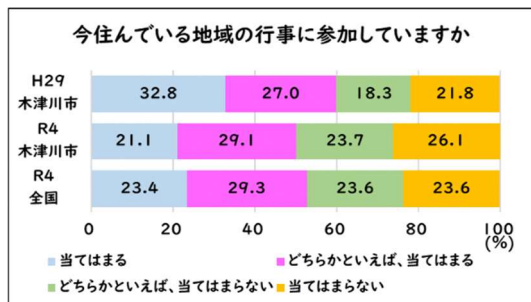
○ 地域行事の参加や関心について

地域行事への参加の状況を見ると、小中学生ともに全国平均より参加している児童生徒の割合が低くなっています。また、5年前に比べても、小中学生ともに、行事に参加している児童生徒の割合は減ってきています。

「地域や社会をよくするために、何をすべきか考えることがありますか」の問いには、小中学生ともに全国平均より低くなっています。また、5年前と比べても減っています。

ふるさと意識や郷土愛をはぐくむ地域に根差した学習を推進し、地域や社会に対する関心をより一層高めていく必要があります。

小学校 6年生



中学校 3年生

